

市民力かわら版



交流を通して 子どもたちに伝えられること

矢板市にあるシルバー大学校北校の矢板市同窓会では、同窓会活動のひとつとして、現在市内の保育園(所)や児童館の十一施設を訪問し、子どもたちとの交流を行っています。

「学校で学んだことを地域に還元していく」それによって自らも健やかで生き生きとした生活を送る。それが栃木県シルバー大学校の存在する大きな目標のひとつです。その世代間交流について北校の鈴木英男教務部長にお話を伺いました。

●きっかけは県のモデル事業

北校の十八期生が現役の時、県の補助事業「世代間交流」で矢板がモデル地区になりました。そこで幼稚園、保育園(所)などの施設との交流が始まり、卒業してからも継続していくという話になりましたが、矢板同窓会の人数の関係もあり、父母会の手が多い幼稚園は省かせてもらって、保育園(所)、児童館との交流が現在まで続いていると聞いています。

今(三十期)と三十二期生が中心となって行っていますので長く受け継がれていますね。折しも「新とちぎ元氣プラン」(2011～2015年)では、「健やかで安心な暮らしを実現するために」が重点戦略となっており、世代間交流が取り上げられています。

●新たな可能性が生まれる場でもある

ボランティアの押し売りではなく、施設側とOBとで話し合い必要なところを手助けする、裏方の仕事を高齢者の長年の経験と知恵で補助する、そこがいいですね。

また、子どもとおじいちゃんやおばあちゃん、知らない者が同志が顔見知りになり笑顔



取って(もともとシルバーですがへ笑)歩くのが困難で信号待ちをしていたら、「保育園によく来てくれていた人ですよ」と言って手助けをしてくれたそうです。シルバー大で勉強したことを子どもたちに返し、その子どもたちからまた返してもらおう、まさに喜びのキャッチボールですよ。

●継続は力

内容としては、自然に触れ合う機会を増やして、体を鍛えながら自然を満喫させるのもいいと思います。

子どもたちとの交流は言葉をお互いながら楽しくやるのが一番大切なことですね。OBも子どもからエネルギーをもらって楽しい時間を過ごして帰るので、これからもずっと続けていって欲しいです。

(R・K)

●喜びのキャッチボール

十年以上も交流を重ねている人もいますから、こんなエピソードがあるんです。年を

